

京都府スーパーサポートセンターSSC ラボを会場に公開講座を実施しました。

日時 5月27日(土) 13:30~16:30

テーマ 「聞こえにくい子どもたちの生活・学習面の困り感について知ろう」

～地域の園・学校で学ぶ子どもたちの支援～

講師 京都府聴覚支援センター 教諭 黒中 泰行  
 京都府北部聴覚支援センター 教諭 浅井 康弘  
 京都府スーパーサポートセンター 教諭 増森 紗弥加



今回の講座は、府内の聴覚支援に携わる地域支援センター（教育）が連携し、実施しました。それぞれのセンターから地域の通常の学級に在籍する聴覚障害の児童生徒の生活・学習面の困り感や具体的な配慮、学校で行う障害理解教育のポイントについての講義でした。



まず、増森先生からは、図や音またクイズ形式など様々な方法で「耳のしくみ」や「補聴器や人工内耳」等についてわかりやすく話をしました。「その子の聴力」、「原因がどこにあるのか」「高い音・低い音どちらが聞こえにくいのか」など個々の異なる聞こえの状況を知ることが、子どもたちへのよりよい支援につながることを述べました。また各困り感の体験では、できるだけ通常の学級場面を想定し行いました。

補聴器体験→「授業の号令：始まる前のざわつきや椅子の引く音」「挙手：はいはいはい!!!当てて!」

【体験者の声】「先生の指示が聞こえない・・・。」「友だちの話し声（私語）が大きく、不快になる・・・。」

イヤーマフ体験→「6年生の授業（国語）場面を設定し、聞こえやすい座席を自ら歩いて探す」

【体験者の声】「先生が黒板を向いて話したり、自分より前に座っている人が発表する時は、聞き取りづらい。」

補聴器・イヤーマフ体験→「グループでの話し合い活動」

【体験者（補聴器）の声】「周りのグループの声が気になった。特に笑い声や拍手の刺激が強かった・・・。」

【体験者（イヤーマフ）の声】「顔を見て話してもらえるとやっていることがわかりやすく、負担軽減になった。」



それぞれの体験で想定される困り感について、どのような支援が必要なのか、京都府聴覚支援センターの黒中先生より話をしました。これまでの園や学校への巡回相談で目にした先生方がさりげなく行っている支援が、聴覚障害の児童生徒にとっても心地よい学級・授業づくりになっていることや、聴覚障害の子どもたちが自ら考えた苦手なことをカバーする方法をわかりやすく紹介しました。グループ活動では、担任が開始する前に「声の大きさはどうだったかな?」と全体に確認したりして行ったり、発問の前に「さーと」「難しいよ」と枕詞をつけてから話し出したりすることで、聞こえにくいという構えができるなどアイデアを出されました。その他にも「音楽」「体育」「プール」「外国語」「校外学習」での配慮についても紹介しました。

最後に、京都府北部聴覚支援センターの浅井先生は、「少しでも知ってもらえたらうれしい」「ちょっと配慮してもらえたらうれしい」という聴覚障害の子どもたちの本音に対応していくことが理解教育のねらいだと述べました。北部聴覚支援センターがこれまでに培った地域の学校で実施した理解教育について、低・中・高学年の発達段階に応じた教材や進め方について紹介いただき、最後に理解教育の先にある共生社会についても触れ、話をしました。



今回の研修では、「困り感体験」「具体的な支援」「理解教育」をキーワードに実施しました。それぞれの立場の中で、聴覚障害の子どもたちの生活や学習に対する理解が高まる講義と体験でした。

<参加者アンケートより 感想（一部抜粋）>

- ・理解教育が共生社会の入り口となり、広がり深まりがあるように、私自身もさらに学んでいきたい。
- ・実際の学校の中で、聞こえにくい子どもたちの立場、周りの子どもたちの立場、教員の立場と色々な立場で考えることができました。
- ・体験からたくさんのがわかった。この「わかっていない」と「わかっている」では、聞こえにくさのある子どもへの対応も変わってくると感じました。